（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

南足柄市立岩原小学校

研究テーマ：考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成
～考えをもち、表現する力を育成するための指導の工夫改善～

１　実践の目的

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、探究型授業を単元計画に位置付け、「課題把握・課題追究・課題解決・振り返り」といったそれぞれの場面で思考力・判断力・表現力等の育成に向けた授業改善を丁寧に進めていく必要がある。本校では、「考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成」を研究テーマとして、３年間を見通した研究を進めることとした。

２年目となる今年度は「考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成」を研究テーマとして継続し、サブテーマを「考えをもち、表現する力を育成するための指導の工夫改善」とした。算数科を軸として、視点を明確にして思考したり、考えたことをいろいろな表現方法で表したり、それをもとにして伝え合ったりする活動を繰り返し積み上げる実践を通して、日常の事象を数理的に捉えて見通しをもち、筋道を立てて論理的に考察する力や、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見出し、統合的・発展的に考察する力の育成を図ることとした。

２　実践の内容

１　考えをもち表現するための指導の工夫

（１）一人ひとりが自分なりの考えをもつ

児童一人ひとりが学習課題を把握し、主体的に取り組めるようにするために、考えの手掛かりとなる既習事項を教室に掲示したり、グループや全体で話し合いながら解決の見通しを丁寧にもたせたり、児童の言葉を使って本時のめあてを立てたりするなどの工夫をした。また、少しずつ順を追って論理的に考えを進めていくことを大切にした。その際、児童が『なぜかというと』『～だから』といったつなぎ言葉を使いながら理由となる根拠を明確に表現する姿をめざした。

（２）自分の言葉を使って表現する

自分なりに解決した過程について、図、式、表、グラフといった数学的な表現の方法を用いて表現することを大切にして指導してきた。考えを発表する場面では、友だちに説明したり友だちの考えを聞いて理解したことを自分で説明したりするために、ペアやグループ、全体などの学習形態と活用場面の工夫をし、児童が授業の中で表現する機会を多く与えた。

２　児童の問いと教師の発問を大切にした授業づくり

「問い」は、児童が問題解決を主体的に進める上で必要なものであり、自力解決できるような「問い」をつくることが重要であると考えた。既習事項を活用すれば解ける、自ら調べたくなる、考えたくなるような「問い」を、児童がもてるようにすることを大切にしてきた。その際、教師は説明を控え、児童の考えを支え、促すための発問や指示をすることも意識した。

また、教師の発問を大切にして授業実践を行ってきた。児童の反応をある程度予想し、その後の授業展開まで考えて、授業のね

らいを達成するために意図をもって発問することを意識した。発問には、事実や方法、理由・根拠などを問うために事前に準備しておく「計画的な発問」と、児童の表現や発言に対してその意味や根拠、よさなどを問う「問い返しの発問」の２つが考えられる。今年度は、まず、「計画的な発問」を吟味して準備しておくことに重点を置き、授業展開や児童の思考に応じた発問を考えた。

３　ICT 機器の効果的な活用

本校では、これまで大切にしてきた対話的な学びや協働的な学びを継続しつつ、効果的に ICT 機器を導入していくことをめざした。児童が一人一台のタブレット端末を持っていることを生かし、「オクリンクで考えを共有する」「電子教科書で視覚化する」「ジャムボードで意見を広げる」など、これまでの具体物や紙を使った指導方法と ICT 機器とを融合させながら最大限の教育的効果を図ってきた。

３　実践の成果

１　授業グランドデザインの活用

全職員が共通の児童の姿をめざして、岩原小学校独自の授業グランドデザインを作成し、教師が具体的な視点をもって授業づくりを行えるようにした。児童は、考えをもつことの大切さや表現することのおもしろさに気づくことができるようになってきた。身に付けた技能を生かして自分なりの考えを伝えたり、多様な交流を通して仲間と学び合ったりすることにより、伝え合うことの喜びや楽しさを感じることができるようになり、伝え合うことへの意欲が高まってきた児童もいた。

２　考えをもち、表現するための手立て

どの授業実践でも、児童の実態に応じて単元計画や本時の展開を変えることや、既習事項を丁寧に振り返って見通しをもたせること、具体物や半具体物の操作をすること、本時の課題を明確にすることなど、様々な指導の工夫が見られ、一人ひとりの児童が自分なりの考えをもつことにつながったと考えられる。

３　学習形態の工夫

考えを発表する場面だけでなく、見通しをもつ場面や考えを深める場面などでもペアや少人数での話し合いの場を意図的に設けた。友だちの考えを他の児童が補足したり繰り返し説明したりすることで、初めは自分の言葉でうまく説明できなかった児童も、友だちと同じことでも「言えた。」「できた。」という成功体験から自信をもち、主体的な学び合いにつながった。

４　今後の展開

今後は、「興味・関心を高め、取り組んでみたいと思う問題場面の提示」「日常生活と関連させ、イメージをもったり、実生活で生かしたりできるような問題場面の提示」など、問題の吟味の仕方や出会わせ方も工夫していきたい。また、児童の思考を促すための発問や問い返しの発問をすることに課題が見られるため、教師が発問した時点から児童が答えを出すまでに時間がかかることを考慮し、すぐに期待する返事が返ってこなくても、発問を連発せずに、時間的なゆとりをもって対応することを大切にしていく。「児童はどんな学びを必要としているか」といった授業づくりの視点を大切にし、さらに学びが深まる姿を求め、授業の工夫・改善に努めていきたい。